

国際政治学科の初年次導入科目における 授業の全面ワークショップ化実験

学習意欲の育成から考える意志の訓練へ

大 熊 忠 之

前稿「国際政治学科の初年次教育における双方向型授業の一展開」〔『修道法学』第三二巻第一号、二〇〇八年九月〕では、国際政治学科の初年次導入科目の展開について、オリエンテーション・履修ガイダンスから初年次入門ゼミへ、そして授業の双方向性を重視した基礎演習、ファーストイヤー・セミナーⅡに転換していった過程を明らかにした。この科目は、履修を義務づける入門科目とされ、大学での学習方法を学ばせることを目的とするものである。この目的に合致する教育形態を求めて試行錯誤がつづいたが、現在では学習のための技能的訓練に重点を置くようになった。初年次導入科目は、学科の新生全員が履修するので、各入学生年次生の学力や学習態度の一般的傾向を反映するものではあるが、科目形態の変遷は環境の変化に学科教員が対応した軌跡ともいえる。もちろん文部「科学」省による高校教育の指導要領の変更、とくに高校におけるゆとり教育をめぐる動揺や大学設置基準の緩和、大学進学率の定着と十八歳人口の減少など、教育環境の激変が大きな要因であることはいままでもない。確かに大学はこれまでも学生の学習態度の変化に直面し、その都度状

況に応じた授業改善に取り組んできた。しかし現在学力低下と呼ばれる変化は、マスとしての学生の総体的学力低下を意味しているのではない。関心や興味対象の分散とその濃度の違い、学習習慣、読書歴・読書量と理解力、口頭表現力、文章力、抽象能力、学習から得た知見と自己の観察との照合経験、複数の事実に関連性を発見する経験、ひいては自分の日常生活における学習の比重の置き方、身体能力のハンディ等々多方面にわたる個人差の拡大という現象として現れているのである。それは大学教育の環境が、質的および量的に膨張をつづける情報を抱えて込んでいることを意味している。いいかえれば大学は絶え間ない変化を内包する離散的な情報空間におかれているのだ。大学教員は授業において履修生の予備知識のレベルを想定しにくいだけでなく、ある程度の予備知識をもつ学生とまったくの初心者とをともに満足させることを求められることになった。そこに参加型授業形態(アクティブ・ラーニング)への関心が高まった背景がある。国際政治学科でも、初年次導入科目の授業改善が繰り返し議論され、数回にわたる科目改正を経て、最近では授業の双方向性を重視するようになった。その経緯については前稿で明らかにしたとおりである。このような環境のなかで大学の外部、とくに国際機関やNGOが、国際開発や人権擁護活動などの事業プログラムで採用しているファシリテーションという方法が、大学教育でも注目されるようになった。これは参加者の自発性と双方向コミュニケーションを基礎とする集団学習の方法であり、その基本形態がワークショップにはかならない。前稿で筆者はみずからの授業改善経験を検討し、ファシリテーション型授業モデルから見た課題を提起した。○八年度のファーストイヤー・セミナーⅡの準備にあたって、この授業を完全ワークショップ形式で行うことに決め、なんとか実施にこぎつけた。本稿はこの実験の過程とその結果を報告し、初年度導入教育における授業改善の参考資料を提供することを目的にしている。

一 授業デザインの一新

ファシリテーションとは、集団作業に参加する個人が成果を上げるとともに、その集団内部に信頼関係と団結力を築くことであった。ワークショップは、そのプロセスをあらかじめ計画し、参加者の集団作業（アクティビティ）の分担、アクティビティの実践、作業経験における相互学習で構成される学習活動である。授業のワークショップ化には授業デザインの変更が必要になるが、ワークショップ型授業と従来型授業とは、デザインの意味が根本的に異なる。従来型授業で教室は担当教員の一人舞台であった。シラバスとは担当教員の発言内容や使用するリソースの詳細を述べたものに止まる。しかしワークショップ型授業では、参加者全員が何らかの役割を演じることが想定されている。したがってその授業デザインは出席者全員の立ち居振る舞いに立ち入らなくてはならない。実施現場での場づくり、プログラム（作業内容）、プラン（作業計画）の進行が重視される理由はそこにある。つまりワークショップで想定される参加者の学習とは、講義やテキストの記述的理解ではなく、会合での発言や他の参加者との討論を経験し、そこから過去の経験を直視して、新たな疑問を発見したり、自分の意見を構築する手がかりを得ることである。それゆえワークショップ型授業では、セメスター単位のシラバス（スケジュール）を授業遂行の具体的目的や方法と進行計画に細分化しなければならない。そこでシラバスを目的書とアジェンダ（授業進行表と役割分担表）に書き換える作業が生じる。目的書とはこの授業の目的、授業の方法、教材、履修生の役割と課題等を明記したものである。アジェンダは各回の授業プランをまとめた授業進行表と履修生の役割分担表で構成される。毎回の授業での履修生の役割分担を設定したものが役割分担表である。つぎに分担の決まったアクティビティごとのもち時間を分単位で決めて、そのアクティビティで授業の流れを編成する作業計画がプランであ

る。授業進行表はセメスター全回分の授業プランを集めたものとなる。

前稿で述べたように、ワークシヨップの観点からみた筆者の授業の弱点は、場づくりとプラン進行にあった。とくに場づくりにおける履修生の仲間意識の形成と共同作業へのコミットメント(参加意欲)強化を念頭に入れていなかった点に課題があった。ワークシヨップ型授業になると、担当教員はテーマを設定し、その学習に必要な教材を準備して、学期の冒頭に授業方法を指示した後は、履修生が共同作業をとおして集団学習するのを見守るということになる。したがって〇八年度のファーストイヤー・セミナーⅡの授業デザインは、前年度の内容を根本的に作りかえる必要があった。

(1) テーマの変更

第一の変更点は授業のテーマである。前年度まではテキストの購読を重視してきた。とくに〇六〇七年度には一冊の歴史書を精読し、歴史理解を体験させることに主眼をおいていた。しかし読書というのは受動的な行為であり、履修生の相互学習が弱くなりがちで集団学習を進めるに至らなかった。そもそも歴史は学生にとって所与の存在であり、自分が働きかける対象として認識されないものであった。しかも史実と学生本人との時間距離が開くほど、歴史は経験のもつイメージネーションの範囲を超える遠い存在となった。そのギャップを埋めるには予備知識の吸収が欠かせないが、それは記録文書の暗記を要求する。それゆえ初年次導入教育の授業をワークシヨップ形式で実施するには、歴史はテーマとして適切であると判断した。代わりに浮上したのが「考えることを考える」というテーマである。これは、学習指導のとき学生が勉強とは何をするのかを理解できていないと感じた筆者の経験に由来している。「もっと勉強しなさい」とか「努力しなさい」といっても、その言葉を聞いた学生が態度を変えることはまずない。そこで勉強という行為を「講義を聴く」

「ノートをとる」「本を読む」「メモを作る」「文章にまとめる」「図書館へ行く」といった幾種もの作業であると説明し、そのために時間をとるよう指導してきた。しかし学生の学習習慣はなかなか変らなかつた。問題は受動的な学習観にあつた。勉強とは与えられた課題を教えられた方法で処理することだと考えられていた。端的にいえばやりたくないが果たすべき最低限の義理のようなもので、試験前の一夜漬けですむ程度の日課としてしか身につけていないのである。このような態度の受動性は思考の受動性に起因するとみてよい。考える、いいかえれば頭を使うということは何をどのように行うことなのか。このこと自体を考えるとという経験を踏まなければ、勉強の自発性が身につかないのではないか。大学で重視されている「学習意欲」よりむしろ「考える意志」の方が重要ではないのか。こうした疑義から、テーマを「考えることを考える」に変更することにした。その頃池田晶子の『14歳からの哲学 考えるための教科書』（二〇〇三年、トランスビュー社刊）が出版され好評を得ていた。この本は高校生を対象とした哲学の入門書である。西欧に源流をもつ哲学は、思考の前提ないし与件を検討することをも、思考の対象とするという知的伝統をもつ。したがって西欧では教育に思考と記述の論理性や実証性を向上させる訓練が導入されている。しかし日本では「考える」という行為を知的作業ないし言語操作として訓練するというプログラムが学校教育に導入されていない。学生と話した経験からみて彼らは高校時代にこの種の本を読んでいないと思われた。

『14歳からの哲学』は、三部三十章からなる二百十頁程度の本である。各部は十章に統一され、以下の項目で構成されている。(Ⅰ 14歳からの哲学A) 考える (三章)、言葉 (二章)、自分は誰か、死をどう考えるか、体の見方、心はどこにあるか、他人とは何か。(Ⅱ 14歳からの哲学B) 家族、社会、規則、理想と現実、友情と愛情、恋愛と性、仕事と生活、品格と名誉、本物と偽物、メディアと書物。(Ⅲ 17歳からの哲学) 宇宙と科学、歴史と人類、善悪 (二章)、自由、宗教、

人生の意味(二章)、存在の謎(二章)。

ここで採り上げられた言葉の多くは、十四歳ないし十七歳の子どもが実生活のなかで聞いたり、読んだりした経験のあるものであった。著者は、子どもの読者が自己の経験と記述内容を照合できるように工夫していた。これを読めば大学の一年次生なら十分な議論ができるはずである。したがってこの本は大学の初年次導入教育のテキストとして使用可能と判断した。ただしこの本には難点があった。高校生向けのために、キーワードの説明に省略が多く大学の教材として大幅な補足が必要であった。

(2) デイベートの導入

一セメスターの授業回数は十五回と決められているが、〇八年度後期は大学行事の関係で十四回となった。このうち二回は学科の全クラス合同授業とすることが予定されていた。⁽¹⁾ワークショップの立ち上げには冒頭のガイダンス・オリエンテーションとアイスブレイクが重要で、それにかかなりの時間を割かなければならない。とくにアイスブレイクは、参加者相互の密接なコミュニケーションをとおして短期間で仲間意識を作り出す活動であり、作業プランの遂行に不可欠なものであった。一クラスの履修者数は前年なみの二十五人と想定されたので、クラスを一チーム五人の五チームに分ける方式は従来どおりとした。授業プランをチーム単位で実施するには、チームの結束力が鍵を握る。そこでガイダンス・オリエンテーションとアイスブレイクに二回分を当てたので、学生主導の授業回数は残る十回となる。つまりこのワークショップは十回分のプラン設計がポイントであった。

テキスト要約の発表は、本の精読、要約、口頭報告のためのレジюме作成、プレゼンテーションという作業経験を積む

意味と、履修生が知識を共有するうえでも重要である。ただし今回は問題が二つあった。一つはすでに触れたようにテキストの記述が簡潔すぎて要約が粗雑になりかねないことである。つぎに報告に当たっていない学生に何をさせるかであった。テキストの割当て箇所に関するコメントや疑問点提出は、作業の求める抽象性のレベルが曖昧なため、対話につながらないことが予想された。そこで初の試みとしてディベートの導人を考えてみた。しかし一回の授業で要約報告とディベートを行うことは無理なことが判明した。ディベートの実施には、あらかじめディベート・テーマを示し、討論者に準備時間を与えなければならぬ。加えて賛成側と反対側のどちらの意見発表がよかつたかを学生に審査させるには、その準備時間も考えねばならない。結局、セメスター前半を要約報告、後半をディベートに分けることに決めた。要約報告を一チーム五人で担当すると、『14歳からの哲学』の要約は一人が二十頁弱を担当するとして授業全体で三分の分量にしかならない。内容的にも物足りないもので、この本に出ているプラトンの『ソクラテスの弁明』と『老子』を加えた。これらの古典教材は原典の理解よりむしろ読書経験を積ませることを重視したもので、この古典を読んだうえで課題に取り組ませることに意義があると判断した。他の一チームに、この要約報告を受ける形でディベート・テーマ案を考えさせることとした。授業でそれを提案させ、クラスで議論して一つのテーマを決定するというシナリオを想定した。そしてディベート本番では、討論者を一チームに当て、テーマに応じて二人か三人の賛成派と反対派に分けることとした。討論の審査に別の一チームを当てる運びとすることで授業プランが固まった。

(3) 場づくりと時間配分

すでに述べたようにワークショップの実施で重要なアクティビティは、場づくり、プログラム、作業プランの進行であつ

た。授業テーマと実施方法が決まったので、この科目のプログラムはほぼ確定した。授業プログラムの遂行に毎回二チームが責任を負うことになった。そこで残る三チームは、「場づくり」と「授業進行」を分担することになる。ワークショップは参加者主導の集団学習であるから、授業進行に一チームを当てた。授業プランで重要となるのは、九十分の授業時間をどのように割り振るかである。授業は、セメスター前半がテキストの要約報告とディベート・テーマの提案、後半はディベートとその審査としたが、いずれも二種類のアクティビティで構成される。まず九十分を二分して、一アクティビティを四十五分以内に納めることを目処とした。冒頭の挨拶や出席確認等のもち時間は十分とした。要約報告とディベート・テーマ提案との作業量を比べ、要約報告のもち時間を一人八分とし、ディベート・テーマ提案は一人三分を割り当てた。ディベート本番では履修生が全員未経験だったので、意見発表のもち時間を一人五分とし、審査は一人四分と決めた。司会者の発言時間を考えて、要約報告に五十分、ディベート・テーマ提案と討論・採決に二十五分、ディベートの意見発表と討論に四十分、ディベート審査に二十分を割くことにした。教員との質疑応答、学生同士のディスカッション、出席カードへの書き込みと会場撤収などに使える時間は、残りの五分または二十分となる。ディベートを実施する授業に時間的余裕がありそうなのは、履修生全員が初心者で時間の予想がつかないからで、長引くことを見込んだ方がよいと考えたからである。初回と二回目の授業プランを別バージョンとしたのは当然である。これで全体の授業プランが固まり、場づくりのアクティビティの細目が明らかになった。授業進行係は、司会、出欠連絡、タイムキーパー、資料・レジュメの収集と配布、進行チェックの五つの役割を分担し、時間管理の責任も負うことになる⁽²⁾。

つぎに重要なアクティビティは会場設営(撤収)である。これも授業の大切な一部であると学生が感じるようにするために、やや大げさな道具立てを考えた。授業進行用ツールとして議長用槌^{ゲイプ}(クラス全体で運営上の意思決定や判断・評価の結論

が出たときに使う)、トーキング・ベア(ワークシヨップでは一般的にトーキング・ステイックと呼ぶ木の棒を使うとされるが、この授業では手持ちのクマのぬいぐるみを使用した。発言者の前に置き、この人以外の発言が禁止されるとともに他のメンバーに発言の傾聴を要請するシンボルとする。発言者と聞き手の集中力を高める効果をもつという)、タイマーとベル(ベルは発言時間オーバーの警告用)、記録用ツールとして授業進行表、画用紙・模造紙、マーカー、座席指定小道具として、名札立て、係札(当日の当番をわかりやすくするためのもの)、掲示(クラス運営のルールを書いたもの)と、これらの搬送用カート二台である。会場設営係は、教務課事務室に預けたこれらの小道具を授業開始前に教室まで搬入し、授業終了時に用具の回収、種類・個数を確認のうえ搬出する。搬入と搬出を二人で分担することにした。もう一人のメンバーと教室でこれらを配置する。この係は、授業運営において授業開始前と終了後の作業に責任を負う。

第三のアクティビティは記録である。記録の大切さは専門家が力説するところだが、記録には二種類ある。一つは発言の内容の記録で、記録の方法としてはキーワードだけを記す、発言を短文でまとめる、図式化するなど、プログラムの目的や内容とともに担当者の技量に合わせて千差万別であつてよい。ただし板書ではなく模造紙や画用紙などに大書きすることと、進行中に会場の壁面に掲示することが重視される。これは発言を聞いている参加者が質問や意見をまとめやすくするためである。板書を避けるのは、スペースがなくなると消してしまうので後で使えないからである。発言者一人に対して記録係は二人とし、発言者が交代するとき交代する。これは担当者により注目点や省略箇所が異なるからである。係は少なくとも授業中二人分の発言の記録の責任をもつことになる。もう一つの記録は進行チェックのためで、プラン実施に要した実時間、予定が崩れた原因などを進行表に書き込み、つぎの授業進行の参考にする。

以上でファーストイヤー・セミナーⅡの授業デザインを一新する新バージョンが固まった。つぎの作業は、ファシリテーター

ターとしての準備である。

二 ファシリテーター側の準備

この授業を側面から支えるのがファシリテーターとしての教員の役割である。とはいえワークシヨップ型授業では、授業開始後は授業進行を履修生に委ねるのであるから、ファシリテーターのお膳立てがきわめて重要となる。授業中の全履修生の振り付けをまとめたものが、目的書とアジェンダにはかからない。準備作業はかなり多かつたが主要なものはずの五つである。第一は目的書とアジェンダの作成である。第二にテキストの解説資料や授業進行に関する資料の収集・作成がある。第三にアイスブレイクの内容の確定が、第四に授業のルールの原案作成がある。最後は授業で使用する小道具の購入・収集と作成など物的準備である。

後期科目の履修者数やクラス構成などは直前まで決まらないことが多いので、テキスト解説や資料収集など文書類の準備を先行し、物的準備の作業は夏季休暇末に行った。

(1) 目的書とアジェンダの作成

○八年度クラスの準備では、目的書とアジェンダを『目的書と授業進行表』という冊子に一本化した。目的書に含まれるのは、授業の目的、テキスト、授業のやりかた、「約束を決める」、の四項目である。このなかで口頭報告（プレゼンテーション）やダイバートの方法とともに、一人のもち時間やレジユメの字数等を説明した。授業のやりかたのところでは、進行の主役が学生であることを強調し、チーム単位で役割を分担して輪番制で行うことを明示した。「約束を決める」も

専門家の意見にもとづいている。ワークシヨップは参加者の協力にかかっているので、すべての参加者が責任感をもって取り組むように、ルールを決めておくことが必要であるという。国内外のワークシヨップで一般的に採用されている基本ルールはきわめて常識的なことからの確認である。このルールは信頼関係を築くうえで重要なので、参加者の自発的発案にもとづく合意が望ましいとされるが、授業時間が限られているので、ファシリテーター側で原案を用意し、それについて履修生の同意を求めて採択する方針をとった。

授業進行表は、担当者名を空欄にした各種の表を作る作業となった。表の種類はつぎのとおりである。①授業スケジュール ②授業進行表（十二回分） ③チーム表 ④チームメンバー表 ⑤チーム別作業分担表 ⑥メンバー別作業予定表。このほかに司会者用に、要約報告クラス用とディベート・クラス用の「司会進行のしおり」を作成した。（資料①～⑦参照）チームとしての一体感を強化するために、自分のチームの名称を考えさせることとし、チームリーダーに責任感を意識させるために、リーダーを班長ではなくボースン（Boatswain）と呼ぶことにした。最初の授業で、履修生が行うべき準備作業として、テキストの購入のほかノート、筆記用具、ファイル、各自のスケジュール表などを揃えることと、チーム作業のためのライブラワーワークの時間を必ず予定表に書き込むことなども明記した。以上でこの冊子は五十頁となった。さらに学習技能のスキル向上の資料として、「レジユメの書き方指針」「ディベートを始める前に」（ウェブ資料）「書評の書き方」（自作）を添付した。

期末試験は前年どおり、授業中に指定した課題図書を書評を書かせることにしていた。前稿で触れたように、レポート作成は一年次生には負担が多く、文章作成の訓練にならないからである。

(2) 『テキスト解説メモ』の作成

『14歳からの哲学』は、三部三十章構成で内容も多岐に及んでいる。読書で未知の言葉に巡り会った場合、国語辞典に頼ろうとする高校生は勉強好きな部類に入るだろう。しかし国語辞典の説明は、収録語を別の語に置き換えただけであることが多い。大学で覚えなければならない言葉の理解は国語辞典の説明では不十分である。とはいえこの科目の狙いは、学生の文献理解を向上させることではなく、テキストの論述をもとに自分の経験をとおして新たな疑問を発見させることにおいた。デイベート・テーマを考えさせることもその一環である。つまり人間社会の説明に使われてきた言葉を軸に、社会的要因、歴史的経緯、記述的特徴について学生の考える姿勢に焦点を向けたのである。この方針に沿ってテキストの『14歳からの哲学』が省略した部分を補強するメモを作成した。ただし筆者は哲学者ではないので、社会科学の視点から自己流でまとめるに止まった。結局全体のボリュームは四十四頁になった。その概要は以下のとおりである。

I 考える (1・3章) 科学的説明とは。意見の正しさとは 論理。考えるという作業。

II 言葉 (4・5章) 言葉は存在するか。意味の意味。言明の真偽。言葉と文字。言葉と力。

III 自己の存在とは (6・7章) 『Who am I?』と『What am I?』自分を定義すること。経験の意味。死の法的定義と死の意味。自分の死をどう捉えるか。生と死のパラドックス。文化・宗教による解釈の多様性。

IV 自分という意識 (8・10章) 己の一部としての体。自分の命は自作できない。心と体の病氣。感情と精神。自己の宗教的認識。他人の存在とは。絶対的存在としての自己。他人と自己との関係。

V 家族と社会 (11・12章) 家族は自然発生的か人為的な集団か。親と子の関係。制度としての家族。社会をどう知るか。

社会は個人を規制するだけの存在か。実在する社会における権力と信頼関係

VI 社会秩序と理想 (13・14章) 性悪説と規則。規則と自由。法と正義。法の種類と法の価値。理想と現実。あこがれと理想。

計画と理念。理想社会とは。

VII 愛 (15・16章) 友情と愛情 孤独。孤独に耐えることの意味。真の友情。性行動と生殖。恋愛と性。宗教と性。性愛に対するアンビバレンス。婚姻と社会。恋愛の文化と作法。制度化された恋愛と性。子供 自分の体から生まれる生命。

VIII 人生の目標とは (17・18章) Work と Labor カネと仕事。遊びと勤労。天職はあるか。精神的価値と世間体。正義と偽善。称賛という活動。

IX 真実と嘘 (19・20章) 本物と亜流。本物と精神性。自分を超越する力。メディア 世界は「又聞き」でつくられる。

メディアの二面性。情報の選別とメディア。古くならない知識とは。

X 時間の概念と歴史 (21・22章) 宇宙のイメージと科学。科学的知見としての宇宙。時間の存在とは。歴史の意味と解釈。

科学的自然観の限界。自立性を失った世界。

XI 善悪 (23・24章) 善悪の根柢は。言語と直感。究極の決断 意志。

XII 精神の自由と宗教 (25・26章) 個人行動と集団行動。組織のなかの個人と不安。組織化される孤独 疎外。生活とリスク。

宗教集団の社会的影響。組織化された宗教。

XIII 人生の意味 (27・28章) 意味と価値。時間と意識。存在の奇跡。運命と自由。

XIV 存在の謎 (29・30章) 考えると分かる。自然の理解・社会の理解。自分を知る・自分を問う。先人の知恵。古典の生命力

この解説メモの巻末に引用した参考文献リストを添付した(資料⑧)。あと二冊のテキスト、プラトンの『ソクラテスの弁明』と『老子』については、専門家の解説のなかからカール・ヤスパースのつぎの論考を選択した。「ソクラテスとプラトン」(山内友三郎訳、ヤスパース選集第一七巻、一九六六年、理想社) および「孔子と老子」(田中元訳、同選集第二三巻、一九六七年)の老子の部分である。この論考はテキストの解釈のみならず、ソクラテスと老子の人物像と時代背景の説明を加えており、訳文も読みやすかったので資料として追加した。

(3) アイスブレークの内容確定

新方式のファーストイヤー・セミナーⅡの実施を考えたとき、授業の導入をどのように運ぶかは時間配分の悩ましい問題であった。従来最初のクラスでは教員と学生の自己紹介、授業方法のガイダンスと履修生の組分けを行っていた。学生参加型科目で授業当初の時間配分がやかいいのは、学生の動作が遅く時間がかかることにある。例えば新入生の自己紹介では、かなりの学生が人前での発言に気後れを感じるらしく、時間がかかる割にはお互いの名前を覚えられないことが多い。また履修者の組分けやグループのリーダー役の選出、発表や報告の順番の決定でも、学生はジャンケンやあみだ籤で決めたがるが、これもまた相当に時間を喰う。そこで今回はまず自己紹介を省略した。履修生全員の名札立てを用意したので、名前を自筆させ授業をとおしてコミュニケーションを図ることにしたのである。組分けについては答えやすい質問表を用意し、それを利用することにした。実際には高校のときの選択科目や熱心に取り組んだ課外活動などの簡単な質問表である。ボースンの選出だけは各チームでの相談とすることにした。発表順の決定は抽選を導入した。時間配分としては、名札の記入と抽選に十分ずつとチームの組分けに十分とることにしたので、アイスブレークに割ける時間は三十分という見通しとなった。アイスブレークは初対面の人同士の緊張感を和らげるコミュニケーション手法とされ、各種のゲームや軽い運動などさまざまな形で実施される³⁾。筆者が重視したのは、新たな学習方式に挑戦するというクラス全体のモラル(士気)とチームの一体感の醸成である。アイスブレークを追加したので、最初の授業は組分けとアイスブレーク・ゲームだけとし、授業ガイダンスとクラスのルールの採択等を二回目に回したのである。

ゲームの実例はインターネットでも数多く紹介されているが、二十五人という人数と会場が教室であるという条件に加えて三十分という時間枠があり、そのなかでできるだけ盛り上がりそうな方法を探さねばならない。そこでクイズと早口

言葉の二つをやることにした。後期授業の開始が北京五輪直後になるので、中国語の競技種目名を当てるクイズを作った。スポーツ種目の中国語表記は日本語の漢字表記とまったく違うものがあるが、漢字は想像力が働くのでクイズになると考えたのである。例えば球技の例を挙げると、羽毛球（バドミントン）、網球（テニス）、足球（サッカー）、曲棍球（ホッケー）、棒球（野球）、壘球（ソフトボール）、手球（ハンドボール）、沙滩排球（ビーチバレー）がある。

早口言葉には昔ながらの定番があるが、新手のものも出現している。これは放送局などで読みにくいニュースや表記を集めたものらしい。⁽⁴⁾ほとんどの学生はこれを読んだことがないように思われたので、新早口言葉をいくつか読ませ、どれだけ読めるかを競わせることにした。この実例を示そう。

焼酎抽出液抽出中につき注意（しょうちゅう ちゅうしゅつえき ちゅうしゅつちゅうにつき ちゅうい）
魔術師魔術修行中（まじゅつし まじゅつ しゅぎょうちゅう）

明恵上人樹上座禪図（みょうえしやうにん じゅじょう ざぜんず）

光合成成毒性化合物（こうごうせい ぐうせい とうせいかこうぶつ）

新進シャンソン歌手総出演新春シャンソンショー（しんしん しゃんそんかしゅ そうしゅつえん しんしゅんシャンソン
ショー）

除雪車除雪作業中（じよせつしや じよせつ さぎょうちゅう）

高架橋橋脚工事（こうかきょう きょうきやく こうじ）

早口言葉だけで一人一分としても二十五分かかるので、ゲームで時間をもてあますことはない判断した。

(4) 「約束した基本ルール」の原案作成

基本ルールについては米国のアイオワ大学のマニュアルを参考にしたが、きわめて常識的な内容である。⁽⁵⁾ 今回の授業ではチームの集団作業を重視したので、それに係わる一項目を追加してつぎの八項目とした。

- 1 すべての授業に欠席・遅刻しない。
- 2 やむを得ない事情で欠席・遅刻するときは必ず連絡する。
- 3 他の受講生に敬意を払い、発言者の話をよく聞く。
- 4 スケジュール・授業進行表を守る。(作業をときはきと始め、時間内に終えるよう準備する)
- 5 任された作業は期限までに完結させる。
- 6 授業中、私語を話さない。
- 7 教室では携帯電話の電源を切る。
- 8 週一回はチーム作業の時間をとる。

以上について一項目ずつ履修生に同意を求めて、採決することにした。全項目の採択後に模造紙に大書したうえで、履修生全員が署名する。この紙を毎回の教室に掲示して、授業早々に全員で朗読することに決めた。

(5) 物的準備の遂行

いよいよ授業開始が迫ってきた頃、物的準備の段階を迎えた。『目的書と授業進行表』『テキスト解説メモ』その他の資料の印刷を依頼し、先述の小道具の調達に取りかかった。これは学内で入手可能なもの、購入するもの、自作を要するも

のに分かれる。当初二回の授業プログラムは、アイスブレイク・ゲームと履修生の組分けやガイダンスが中心なので、自作を要する小道具が多くなる。その後の授業は要約報告のある前半とディベートをやる後半で、若干の小道具は入れ替えが必要となった。毎回使う小道具のうち名札立て、掲示用のマグネット鉤、画用紙、タイマー、ベルなど自作の難しいものや必要量の多いものは購入せざるを得ない。アイスブレイク・ゲームはクイズと早口言葉なので、問題を画仙紙や模造紙に大書した。チームの組分けにつかう質問表も、やや大きめのコピー紙に書き、コピーを作成した。籤引きは1から5までの番号をつけた短い棒を五セット用意した。「約束した基本ルール」は授業中に書くので、筆と墨汁を準備した。テキスト類やその他の資料と、学内調達が可能な小道具を集め、これを段ボール四個に収納し、カート二台で運べるような段取りをとった。以上で授業準備が完了した。

二 授業パーフォーマンスと学生の反応

授業パーフォーマンスは、立ち上げのためのイントロ授業、テキスト要約の発表とディベートテーマを決める前半、そしてディベート本番となる後半とで、三つのプログラムの違いを反映していた。この科目の時間割は水曜の一眼目（午前九時〇五分から十時十五分まで）に当てられたので、冬の厳しくなる学期後半の出席状況が懸念された。また全員が未経験のことに取組むことから、回数を積むことに慣れてくることと一回の経験では十分こなせないものが出てくることが予想された。

(1) 順調な滑り出しをみたイントロ授業

初回の授業では配付資料やテキストと参考資料、それに授業用小道具がカート三台分もあったため、担当教員が二回に分けて教室に運ぶことからはじまった。挨拶のあとまず出席者に自分の名前をネームプレートに書かせた。このときチーム名を書き加える余白を残すよう指示した。全員ネームプレートを名札立てに入れて、座席の前に置かせてから、アイスブレークのゲームに移った。

堅さがとれなかった出席者も、スポーツ競技名の中国語表記を当てさせるクイズで、リラックスしはじめた。球技のところでは、羽毛球、足球、手球などで正解も出るようになった。早口言葉は、紙に書いてある順に読ませ、とちつてたところで隣の人と交代し、また最初からはじめるというやりかたで進めた。これは大いに盛り上がり、学生の間にかなりうち解けた雰囲気が生じた。時間を見計らって組分けに入った。

質問表の用紙を渡し、高校のときの選択科目三つと課外活動経験があればそれを加えたなかから、自分が積極的に取り組んだ順に三つを記入させた。回収した回答をジャンル別に黒板に掲示しながら組分けを行った。日本史、世界史、地理、政治経済とスポーツ系部活を軸とする五チームのメンバーが決まった。欠席者が三名いたのでメンバーが四人と三人のチームができた。ボースンの選出は各チームに任せ、チームごとに発表させた。チームごとの当番順はボースンによる抽選で行い、チーム内の作業順も五チーム同時に抽選で決定した。こうして授業進行表で空欄になっていた担当チーム（番号を仮名称とした）と担当者名が埋まった。また別配布した空欄のままのチームメンバー表に、自分の名前と連絡先を記入させ回収した。そしてみんなに自分のチームと自分自身の作業分担を確認して、各自の授業進行表に書き込むよう伝えた。最後にチーム名をメンバーで考えて決め、次回発表することを課題として指示した。出席カードをみると、学生の反応は

まだ「はじめてでドキドキしました」とか「チームのリーダーがおもしろい奴になった」という感想に止まっていた。

第二回目の授業は各チーム名の発表ではじまった。ネーミングはチーム内のコミュニケーションの活発さを反映するの
で発表に注目していた。前回授業のあとにチームメンバーが集まり、話し合っていたら一ひねりしたネーミングが出るは
ずだと考えていた。しかし現実は期待はずれであった。部活経験者グループが決めたクール・アンド・ビューティ（これ
もひよっとすると部活のときの監督にいわれていたことかも知れないが）を除いて、選択科目名をチームの名称に決めていた。担
当教員として失望の念を伝え、ネーミングひとつにも考える意味があることと、チームで学ぶことの意義を説明した。こ
うして授業ガイダンスに移った。授業のやり方を中心に要約の手順、レジユメの書き方、ディベートの方法を説明した後、
要約報告とかディベートでの意見発表のような課題作業だけでなく、他の役割もこの科目の勉強に重要な意味をもつこと
を力説した。とくに他人の発言を熱心に聞くことの大切さを指摘した。聞く人が熱心なら話す側もそれに応えねばならな
いからだ。

最後に「約束した基本ルール」を一項目ずつ揭示しその同意を求めた。合意した項目を全員で朗読し、すべての同意が
成立したとき、模造紙に大書した。これに全員が署名したうえで、もう一度朗読した。この紙を毎回の授業で必ず教室に
掲示することと授業の冒頭に朗読することにしようとして提案した。

二回目になると学生の態度に変化が見られた。出席カードには「徐々にだとしても主体的に取り組んでいきたい」「今
日はもっと集中すべきだと思った」「たまたま集中力が欠けていた」といった自己観察が見られた。そして「次回から発表
なのでがんばりたい」という期待も生じていた。三人の欠席者はおそらくこの科目を履修しないと決めた学生であると推
測されたので、人数の少ないチームの作業をカバーする必要が出てきた。この二回の授業で、教員としての通常の役割を

終えることになり、以後はファシリテーターに徹しなければならぬ。初のワークシヨップ型授業の導入はなんとか順調な滑り出しをみせた。

(2) 初体験からのワークシヨップづくり

第三回目の授業からワークシヨップが本格化した。全員が未経験だったが、出席カードをみるといちばんプレッシャーがかかったのは授業進行係だったと思われる。とくに司会はかなり緊張したようだ。「私は司会をやったのですが、全く上手く進めることができませんでした。とくにみんなに意見を求めるときに、どんな質問が答えやすいのかなど、ちゃんと考えないといけないと思いました。人前で話すのが苦手なのを直さないといけないと思いました」と書いている。実際はじめて司会なるものを体験したために、出席者全員が自分の指示を待つていることや授業進行の決断を自分がしなければならぬことが分かっていなかった。別の担当では「資料配付を担当しました。同じチームの一人が欠席したため、タイムキーパーも兼務しました。欠席者がいるとうまく進まないで、授業に出席する重要さを感じました」と述べている。これはまだチームワークが機能していないことを示すものともいえる。別の一人は「今回担当したのは出席確認でした。はじめてで何をすればいいのか分からず、結局のところ他の係を手伝うことしかできませんでした」という戸惑いをみせていた。これは出欠確認の担当者が自分から出欠情報を把握し、当番の係に連絡する姿勢ができていないことを意味している。ボースンがリーダーシップをとれていないことも何わせていた。注目すべきことは誰もが次回はやりたいと述べていたことである。例えば「今日私は会場係だったのにチームの人に任せてしまったので、次回からちゃんとしようと思いました」という学生がいた。役割分担に誰もが責任を感じているとの心証を得た。

要約報告の担当者が感じた困難は従来どおりである。誰もがテキストの要約、レジュメの作成、プレゼンテーションの記述技法や発言技能の未熟さを感じていた。「今日は初めてということ、レジュメの作り方や発表の仕方が分からなくてとても不安でした。しかしたいした問題もなく終えることができて安心しました」とか「もっとレジュメをうまく作るべきだった」と思う学生がいるのはいつもどおりである。内容の理解の難しさを述べたものもある。「本の内容が分かりづらく要約にあやふやなところがあり、きちんと理解して書くこと「の大切さ」が分かりました」とか「要約文の間違ひが多くあつて、それを修正しているうちに、矛盾が出てきたので、もっと論理的に文章を書きたい」という学生もいた。「今日ははじめての発表で少し緊張しました。いいかかったことがみんなに伝わっているか心配です。次からもっと早く準備を始めてゆとりをもって発表したいと思いました」というのはほとんどの学生の気持ちであろう。緊張と不安を抱えながら準備し、終わってみて安心感を感じ、次回の意欲を燃やすというのが、そのパターンである。

デイベートテーマの提案は思ひのほか楽にこなしたようである。「はじめての授業で流れをつかむのに時間がかかったが、デイベートテーマ発表係としての仕事はできました」と書いた学生は、授業中に他人の発言をかなり熱心に聞いていたと思われる。五人の提案を出席者の採決で一つに絞るので、採択されなかった人はちよつとがっかりしたようだ。「賛成の票が集まらなかったのも、もっとわかりやすいテーマを提示できればよかつたと思ひました」とある。結局、テーマは「言葉の意味はすべての人間に共通する同じものである」に決まつた。次点は「人間は決して死なないものである」であつた。予想外の学習効果をもたらしたのは記録である。学生は他人の発言を聞きながらメモをとることに馴れていないことが判明した。「記録をとるとき聞きながら頭で整理して書くのが大変だつた」「報告者の発表を聞くこと、レジュメを見ること、大事なポイントを書き留めることを同時にやるのが大変だつた」「記録をとるのに発表者によつてどこが大事かが違

うのでまとめるのに困ってしまった」と担当者は作業の難しさをこぼしていた。「発表者の言っている大事などころをなかなか書けなくて、書いていても次のことを聞いていると今書いていることを忘れてしまって、結局あまり書けませんでした」という状態にあった。

ワークシヨップ初日の学生の感想には「哲学という難しい分野に加え、ワークシヨップという私たちにとって初めての試みで、今日の授業はとても難しく感じました」というのが一方で、「初めてのワークシヨップをやってみて、一人々に役割が振り分けられて、やっとそのワークシヨップができあがり、とても楽しかった。また報告者のまとめに対して、ディベートテーマを決めたチームもすごいと思った」学生もいた。この授業は学生の半信半疑からスタートした。

とはいえワークシヨップ二回目になると早くも学生は馴れてきた。「今日は二回目ということもあり、進行もスムーズで効率よくできたと思う」という肯定的な学生のコメントも出てきた。しかし司会担当者は「司会進行で次のシチュエーションへうまく運べなかった」と辛い自己評価をしている。タイムキーパーも「もう少し司会の助けができたらと思います」と反省の弁を書いていた。会場係は「前のグループの例があったので少し楽だった」「授業開始前に設営できてよかったと思います」と満足した様子であった。

要約報告とディベートテーマ提案は個人的要因が絡む問題なので、あまり進展は見られなかった。発表時間が短すぎたとか、レジュメは用意してきたがプレゼンテーション用の原稿を作らなかったので混乱したとかの反省しきりである。とはいえ「原稿を読むスピードが速すぎて伝わりにくかったかも知れない。要約やレジュメはディベートテーマを考えやすく相手に伝えるため、なるべくシンプルにするよう心がけました」という心配りをみせたものもいた。

記録係はかなりの進歩をみせた。「一人々々の発表を集中して聞いた。うまく要約できるようにしたい」というレベル

から「報告者のメモをとることに大分馴れてきました。でもデイベートテーマを聞き逃してしまいました」という担当者もいたが、初回のような戸惑いはない。さらに「記録係は紙に書いてホワイトボードに貼るのと、メモをとらなければならないので、みんなで協力して分担できるといいと思います」と改善点を指摘した学生も現れた。この日決まったデイベートテーマは、「ニュースは役に立つか」となった。次点は「人間には生命より高い価値がある」であった。

三回目となると学生たちはワークショップのなかに各自が勉強の意味を見つけたようである。要約報告の不安や結果の不十分さを述べる学生がいること、記録をとることの難しさに苛立つ学生がいるのは相変わらずである。しかしみんな授業進行が円滑になったと感じていた。この日は学科教員が参観し、授業最後のコメントのなかで、居眠りする学生がひとりもいなかったことを評価したうえで、「その場に貢献するスキル」の重要性を力説した。学生の方にも「私たちのチームで欠席者がいたのでそれは残念だったが、「授業は」とても楽しかった。この授業は一人々々の役割が重要なので他の人に迷惑をかけないよう一回々々を大切にして授業を受けたと思う」と述べた人や「今までよりも大分馴れてきたと思います。考えることが授業の目的だと思うので、考えて授業に備えていこうと思います。先生が最後にお疲れさまと言おうといったのは、改めてとてもいいことだと思います」とワークショップを支えようという意識が目立ってきた。

他方、内容面での難しさを感じはじめた学生が増えたようである。「本を読んでも分からない部分が出てきて、とまどってしまった」「今日は報告だった。うまくまとめることができなくて、少しも満足できなかった」「テキストに出ている」生命という言葉について、「教員の指摘した」誰の生命なのか。自分から生まれた生命はどうか。考える力が足りなかった」という記述が出席カードにあり、以前より内容面での反省が見られる。デイベートテーマの提案でも「もっとテキストを深く読み込んでよりよいテーマを提示できればよかったと思う」学生が出てきた。学生がワークショップ形式に適応

し、授業の内容に関心を向けるようになったためであろう。この回に決まったデイベートテーマは「殺人が正当化される場合がある」となった。

このような傾向は、テキストが古典になった授業でさらに顕著になった。『ソクラテスの弁明』を読んだ学生は、プラトンではなくソクラテスという人物に強い印象をもったようだ。「ソクラテスは有名な哲学者であったことしか知らなかったが、ソクラテスについて見直すきっかけになった」「大学一年生のこんな小さなクラスでもこれだけ多くの意見が出る場所に、ソクラテスが歴史に名を残した理由が垣間見えた気がします」という感想がある。ソクラテスの言説については「ソクラテスの言い分の半分は理解できなかった。死を恐れるということは、知らないことを知っていると思ひこむこととあったが、それは理解できた」と理解の難しさを感じながらも共感を示した学生がいた。『弁明』は難しかったけれど、考えが深いと思いました。ソクラテスは理屈っぽいとか今いたら好かれないうという人もいたけれど、ソクラテスの発言には結構納得させられたと思います」という記述もあった。テキストを読んで「知識の意味を間違えないようにしたい」という教訓を発見したのもや「ソクラテスは法律を重視し、順う義務があると考えた点で、現代と同じ考え方が、そのため批判を受けたと思った」とそれなりの解釈を表明した人もいる。

しかし対話篇という形式で書かれたプラトンのテキストを要約したり、それを読んでデイベートテーマを考えるのは相当難航したとみえる。デイベートテーマ提案後のディスカッションでは、焦点が拡散してクラス全体がまとまりを失い、テーマがなかなか決定できない状況になった。ファシリテーターとして、このときだけはやむを得ないと判断し、テーマを助言した。その結果デイベートテーマは「悪法であっても法は守らねばならないものである」に決まった。

『老子』はプラトン以上に難解だったとみえる。学生のほとんどが中国古典を読んだ経験がないために、中国的発想や

記述形式に当惑したらしい。それでも老子は学生にかなりのインパクトを与えたことは疑いない。「老子は有名な人物であるにもかかわらず、その存在が疑問視されていることに驚いた」学生や、「何が本当かを見極める力。老子はもつとじつくり読まないで理解できないと思った」ものがいた。また現代に結びつけて「考える力を国民一人ひとりが養わないと、小泉劇場のように民主主義が危うくなると思いました」と記し、自分なりの意味を見つけた人もいる。しかし『老子』のテキスト自体は短い言説を集めたものなので、デイベートテーマを考えるのにはさほど苦勞を感じなかったようだ。「学問は生活に不可欠である」と決まった。

このようにワークショップの前半は、この方式に馴れることからはじまったが、初心者ながらどうにかワークショップなるものをつくりだすことはできた。しかし内容の充実度という問題が残され、それが後半の課題となった。

(3) デイベートの失敗、ワークショップの迷走

先述のようにこの授業の後半にはデイベートを導入することを計画していた。結果から見て多くの学生がデイベートという形式に引きつけられたのは確かである。ひとつの命題について肯定論と否定論を別々のグループに考えさせ、勝敗のつくゲームとして意見を競わせるという形式に、新たな学習法としての興味を感じたようだ。誰もがゲームの勝ち負けを経験したことがあり、勝負に勝ちたいと思うのは当然であろう。デイベートへの関心が高い最大の理由は、勝負という目に見える目標にある。勉強の目標というのは、学生にとってきわめて抽象的ないしははるかに遠い将来的なものではない。デイベートに勝つというのは手の届く目標である。しかもこの勝負は体力とか身体的技術、ゲーム経験ではなく、ギャンブルのような偶然性もなく、知的学習とプレゼンテーションによって決まる。授業で行なうデイベートは誰にも勝つチャ

ンスがあるゲームとして登場した。ディベートは明らかに学生の知的刺激剤となった。学生の意欲をどのようにして「考える意志」につなげるかが当面の課題になった。しかし授業へのディベートの導入は学生の意欲を増進させたが、予想外の混乱ももたらした。ワークシヨップとディベートという二つの学習方式が混入したため、ディベートは失敗しワークシヨップが迷走したのである。

初回の授業は、ともかくもディベートという活動を体験したこと自体に意義があった。「今日は初めてのディベートの授業でした。ディベートの流れがだいたい分かりました」というのは初心者率直な印象であろう。意見発表の担当者は「最初のディベートだったせいかわまく自分の意見がまとめられなかった」「ディベートは初挑戦でした。賛成派だったけれど、準備不足もあって負けました」「はじめのディベートで緊張しました。もう少し反対意見をうまくまとめたいかった」と悔しさをにじませた反省が多い。初体験の不安のなかで「どうなるかと思っただけで、自分側の意見を言っていけばいいのだと思いました」と討論者という設定された立場というものを実感できた学生がいた。他の学生のなかにはディベートのゲーム性に興味を示したものが少なくなかった。「意見の言い合いを見ておもしろいと思いました」「賛成派の人が反論に困っているのを見て、ディベートはおもしろいと思いました」という記述がある。プレーヤー目線から授業を観察した学生もいた。「ディベートは反論が出たとき、うまく説明できたら勝てると思います」「どのようにして相手に反論させないようにするかを考えないといけないと思います」といった認識が見られる。授業進行では、司会者が自省していたように、進行が円滑さを欠き、意見発表後の討論もぎこちなく終わってしまった。もつとも強い批判をしていたのは記録係で、意見発表が曖昧で討論も焦点が定まらず、メモをとったり記録を書くのに困ったと記している。

二回目のテーマは「ニュースは役に立つか」であった。学生の反応をみると「ニュースを見て役立つか役立たないか」「の

判断」もあるが、役立たせようとするのが大事だと思いました」「役に立たないニュースがあるにせよ、自分としてはどんな情報も手に入れて損はないと思った」「くだらないゴシップ情報でも密かな楽しみとして利用しています」といった感想がある。

とはいえ二回目ともなると、学生の関心が高かっただけに、授業進行に関するさまざまな問題が指摘された。第一にディベートの時間が短いという意見がかなりあった。これは意見発表だけの時間なのか、その後の討論を含めたものなのかは不明であるが、まずは意見発表の問題であろう。時間配分を計画したとき、ディベート授業を行っている教員の話を参考にした。初心者はせいぜい三分しかもたないというので、同じ時間の割当てとした。これは、一分四百字程度のスピードで話すとして、千二百字ほどの言語情報量である。賛成と反対を合わせて五名で発表する場合、各自が千字超の長さで意見をまとめても、十五分程度しかかからならない。予想に反して準備不足でうまくまとまらないとどうしても短くなりがちであった。そうなること後の討論も断片的なやりとりで終る。そのうえ発表者に欠席が出るといふ事態も重なった。学生のコメントに「今日のディベートは十〜十五分程度で終わった気がします。理想とするディベートはどのくらいですか」とあった。

第二の問題はテーマの立て方にある。肯定にせよ否定にせよ常識論に近い方が意見をまとめやすい。つまりテーマの立て方によって、意見がまとめやすい側とまとめにくい側が生じるのである。今回のテーマでは肯定側が有利になった。役に立たないニュースがあることを立証するには、かなりの知識量と分析能力が要る。「あっけなく賛成で終わってしまいました。もっといろいろな意見が出ればいいと思います」とか「賛成側の方が意見がいっぱいあってやりやすかったと思うけれど、反対側の人はもう少しがんばって欲しかった」とのコメントがあった。

第三に立論に必要な裏付け情報の収集能力がある。これはテーマの理解力に係わっている。今回反対側は、役に立たないニュースとして芸能ニュースやゴシップを持ちだして持論を展開したが、思いつきの域を出なかった。例えばメディアの体質からニュースのバイアスに焦点を当てる視点もあつたはずである。問題は意見発表者の問題意識の浅さにあつた。デイベートという競技で、どのような裏付けをもてば自分たちが相手より説得力をもてるかを見通せるかは、問題意識の深さにかかっている。そのような取り組みには相当高密度の準備が求められよう。

第四に審査基準の問題が指摘された。担当者は「賛成も反対もよい発言をしていたので、どっちにしようか迷ってしまった」とか、「相手の考えに評価をつけて、自分の考えを述べるのは大変難しかった」と訴えていた。デイベートの評価は内容の是非、つまり価値判断を評価対象から除外しないとゲームとして成立しない。主張の構成、論理性、立証根拠の妥当性、裏付けの十分さとともに発言の態度や発声の適切性、ユーモアやジョークを含めた聴衆へのアピール度ないし聴衆側の反応の強さなどに、競技プレーーとしての評価尺度があるはずで、事前のオリエンテーションが必要だつたと思われる。

第五に、教室の座席配置についての意見が出された。「デイベートをするときは机を移動させて、反対側と賛成側の人がお互いに向かい合わせて座るようにしたらいいと思った」とある。実は、授業プランの計画中に教室の座席配置変更を考えた経緯がある。しかし時間配分の点から断念せざるを得なかった。北米の大学で一般的なテーブル付椅子は、座席配置の変更により便利である。しかし本学のゼミ教室で模様替えをするには机と椅子の移動が必要で、授業中の座席配置の変更は、原状復帰もあるためかなり時間がかかることが判明した。

以上のような指摘が出たということは、授業の重点がデイベートに移行したことを示している。意見発表、討論、審査意見の発表と採決という当初の計画に、出席者全員の審査意見の表明や討論のほかに一般的な疑問の提示など予定外のア

クティビティが加わってきた。時間配分が崩れたために、司会担当者は授業進行を掌握できなくなり、記録係は授業のアクティビティのどれを担当すべきか分からなくなっていた。会場係は小道具の搬送以外の役割が霞んでしまった。こうしてワークショップが迷走する羽目になった。したがってこれ以後の授業は、ワークショップのなかでどうにかダイベートルASHIきものを実現させようという試練の連続となった。

三回目のテーマは「殺人が正当化される場合がある」となっていた。学生にこのテーマは分かりやすかつたらしいのと、二回の経験があったせいも、多少は実質的討論が実現した。司会担当は「司会は難しかったが、大分ダイベートルASHIなってきた」と記していたし、他からも「今日のダイベートルASHI発表は今までのなかで一番よいものだったと思う」と好評だった。「今日は報告をやったが、議題が難しくてなかなか説得力のある報告ができなかつたと思う。しかしいろいろな人の意見を聞き勉強になった」と相変わらずの反応があつたが、今回目立つたのは自分の意見と逆の意見を発表することの難しさを訴えていた点である。「自分は賛成意見だったので、反対するのが難かつた」とか「議題には本当は反対なのですが、賛成意見を言わなければならぬので頑張りました。結果的にはよいダイベートルASHIができてよかつたです」というのがある。もう少し複雑な気持ちを表明した学生もいた。「今回は討論者反対側を担当しました。人を殺すことが正当化されないことは当たり前だと思つていたのに、ダイベートルASHIで負けたことはとても悔しかつたです。もつと説得力のある発言ができればよかつたです」と述べている。これは自分の個人的立場を離れて、逆の意見を述べる場合でさえ説得力を高められることに気づいたことを物語る。

テーマ自体が難問であることを感じた学生も多い。「難しいテーマだと思つた。答えが出るテーマでないと思つた。間違つた知識を正し、知恵をもてるようになりたい」という反応があつた。かなり考へていることを伺わせるものとして「議

論された殺人の「正当化とは、法によつての正当化で、それ以外の視点は出ませんでした」という指摘や「正当防衛だから人を殺してもいいのかという疑問をもつた。死人は発言できないのだから、殺した人が正当防衛だと言ひ張れば、その殺人は正当化されてしまうのかなと思つた」という意見があつた。立論の難しさを指摘したのもある。「藤原正彦さんが『国家の品格』のなかで、人を殺してはいけないというのは、論理で語れない（駄目なものは駄目）」と書いていましたが、それを論理でディベートするのは難しかつたと思ひます」とある。

この日は学習支援センターの指導員の参観があつた。その助言もあり、出席者全員が意見を表明することになつた。これはほとんどすべての学生に好評であつたが、ディベートとして「物足りなさを感じた」学生もいた。とくに際だつてユニークな意見を示した学生がいた。やや長いがそれを示そう。「この教室の半分以上が死刑に賛成する意見を述べていた。自分は意見がまとまつていないと思ひ知つた。みんな、それほど確信をもつた意見だとは思ひえないが、今日の意見が將來につながつていくのだと確信した」。この日の授業進行では司会の評判がよかつた。記録係がこぼしていたのは相変わらずであつた。

ディベートテーマもいよいよプラトンの言説にもとづく「悪法であつても法は守らなければならない」の順番となつた。この日の学生の反応は、テーマに対する意見表明がほとんどであつた。

ナイーブなところでは「法律は誰のためにあるのか今まで考えたことがなかつたので考えさせられました」というのがある。しかし優等生的な意見も少なくなつた。「国は法で動いている。もし守られなかつたら自分に被害が出る。だから賛成した」とある。「私は現代に定着してゐる rule of law という考えがあるので反対でした。しかし賛成「意見」を

担当することになり、反対意見報告者を除く全員が賛成に回ったので驚きました」とクラスの傾向に対する心情もあった。法的価値の判断に触れた意見も示された。「悪法といつてもどこから悪法なのか、基準がないと見分けるのが難しいと思いましたが」との記述がある。「そもそも善悪の判断は人それぞれで違う。そのため誰かが悪法と判断して守らないと、秩序が乱れる」との懸念も表明された。法の改正の大切さに気づいた発言もある。「悪法であっても順わなければならぬのは、とてもいやでつらいことです。しかし悪法だからといって順わなければ、なくてはならない法までも侵されてしまいます。ぜひ悪法を改善して欲しいです」との訴えや「悪法に抵抗できるようなシステムがないといけません」と、立憲制度のあり方への言及も見られた。また「法の解釈は、時代性、立場の違いによって変化するものであると、改めて感じました」という認識もあった。この日の出席カードには、授業進行に関するコメントはほとんど出なかった。

最後の授業のデイベートテーマは〔学問は生活に不可欠である〕であったが、討論は学歴の是非のような形になった。出席カードの記述は最終日ということもあって、授業全体の評価が大半であった。多くの学生が満足の意と担当教員に対する謝意を述べていた。しかし評価は多様でまじめにくい。主な記述を並べよう。

「はじめてワークショップを体験し、最初は戸惑いもあったけれど、だんだん馴れて楽しい授業でした」「初めの頃はデイベートや報告は大変そうだと思っていたけれど、とても充実していて今思うととてもよかったです」「多くのことを学びました。はじめてデイベート方式の授業を行って、他人の意見を聞き、賛成反対と話しました。とてもおもしろい授業でした」と、経験を積むことで新たな学習方式に適應できたこととそれなりに勉強のやりがいを感じたことが分かる。

ワークショップでの経験の意味をつかんだ学生もいた。「この授業で討論・デイベートというのがどういうものかを知ることができました。司会と役割分担。このような方式は色々な討論の場でも生かせると思います」と記している。テキ

ストの内容から教訓を得た学生も次のように述べている。「問題を解決するにも、状況を判断するにも、何を基準として判断するのかが重要だと分かった」「今日の学問についてのテーマは、私たちに関係があることなのでおもしろかったです。大学で何を学ぶかをちゃんと考えないといけないと思いました」「この授業で考える力を身につけることが大事だと勉強しました。自分の経験を超越することが起こったときこそ、考える力が必要だと思いました」。

また多様な考え方に触れた体験に意味を見いだした学生がいた。「この授業では普段あまり深く考えないテーマについて考えることが多く、苦勞し〔て読んだテキストに〕分からないことが多かった。その一方でさまざまな考えに触れることができたし、自分でテーマについて考えることができた」と記していた。

授業の終盤は、欠席者もかなりあつてディベートや審査が早く終わったために、ファシリテーターというより担当教員として学生の質問に答えるのに時間を費やした。質問は多岐に及んでいたができる限り、関連する参考文献を紹介して説明した。ここで強調したのは、記憶しただけの知識はすぐ陳腐化して意味を失うことと、現実の問題解決を迫られたとき、すぐ解答を探すのではなく、問題を知識化することの重要性である。問題を知識の形式に記述できれば、解決方法を知識のなかから探すことが可能になるからである。こうして〇八年度のファーストイヤー・セミナーIIの授業は終わった。それは筆者にとって最後の初年次導入科目であった。

四 結び 心身行動としての学習——意識・行動・記述の統合と場としての大学

この授業を終えて実感したことは、学習とは人間の心身行動の一部にすぎないということである。教育が知識の伝達とすみ、学生に記憶力が求められる時代はすでに過ぎ去った。変化の激しい世界にあつて、人間個人に必要な知識は意識と

行動と記述とを統合するものとして現れる。学生の自発的学習を重視する視点から、参加型教育手法が考案されファシリテーションという技術的次元でひとつの地平に達した。その基本形態であるワークショップは、参加者相互のコミュニケーション密度を亢進する場を人為的につくり出して、自発的学習を促すシステムである。ファーストイヤー・セミナーⅡの授業を、完全ワークショップ化するという実験でいくつかの成果と課題が明らかになった。

第一にあげるべき成果は、授業に参加した学生が高密度の学習プログラムを完遂し得たという事実である。授業中居眠りする学生がいなかっただけでなく、私語もまったくなかった。教員だけでなく他の学生の発言にも傾注していた。プレゼンテーションも、完成度は別にして、とにかくやり遂げようという熱意が見られた。その他の役割も学生たちだけで何とかこなしていた。しかし一人も脱落者を出さないというのはやはり無理だった。大学は義務教育の場ではない。学ぶ意志をもたない人の離脱が止められないことは受け入れざるを得ない。

第二に哲学という多面的教材の有効性である。国際政治学にせよ経済学や法律学にせよ社会科学が対象とする争点は範囲が広く問題は多様で事例の数は膨大である。それぞれの研究領域で確立した知識は細分化され、独自の抽象的記述を発達させてきた。大学の新入生が勉強に戸惑うのは、学ぶという航海の航路が分からず呆然とする状態におかれるからである。そもそも自分の目的地すら分からないのだ。哲学の入門書は、使いようによっては、学生に海図を提示し、航海術を訓練するものとなる。

第三に心身をもとに使う共同作業を経験させたことである。多くの学生の指摘から見ても「ワークショップはそれぞれの役割がちゃんと果たされないと完成しないので、個々人の意欲が大切であると思う」という認識が、学生に浸透したのは確かである。それは自分自身もみずからの役割を果たさねばならないという責任感につながるものであった。そして出番

のない局面においても他人の発言に耳を傾けるといふ態度も生まれた。

第四に具体的な行動目標の存在がある。講義科目で予習や復習の大切さをどんなに説明しても、学生から見て行動目標が何なのか分かり難い。せいぜい遅刻や欠席しないことが目標として自覚されるにすぎない。ワークショップ型授業では、毎週の行動が計画され次の週までに完了しなければならない作業課題が、すべての学生に課されるのである。主体性は強制によって実現できない。全体のシステムのなかで明確な役割が与えられ、行動目標が示されるとき自発性が生まれるのである。

最後にディベートの効用である。この授業で学生は、本格的ディベート競技にほど遠いとはいえ、ディベートをつくる経験をした。テキストを読み内容を発表する、あるいはその発表を聞いてテーマを探し、テーマが決まった後は賛否いずれかの意見を作成し、発表の競技でそれを評価するという一連の流れに参加したのである。それは、記述的知識をもとに現実の世界のなかに問題を発見し、それを意見という記述に再転換する作業の繰り返しであった。これにより知覚と記述の統合を体で覚えていったのである。

課題として第一にあげなければならないのは、学習スキルの訓練が不十分だったことである。この授業では担当教員はスケジュールをこなすのに手一杯の状態にあった。そのためとくに書くスキルの指導を十分行えなかった。これは期末試験として課した書評に著しい。授業での経験にもとづき政治を考える課題図書として次の二冊を示した。子安宣邦著『本居宣長とは誰か』(二〇〇五年、平凡社新書)、佐藤弘夫著『神国日本』(二〇〇六年、ちくま新書)で、どちらか一冊を選んで書評を書くことを課した。しかし提出された作品に授業との関連性はほとんど何われなかった。ワークショップ型授業には、意識ないし知覚、行動、記述の三つの次元がある。教育で記述次元を重視する選択は確かにある。それはどう決める

かの問題であり、国際政治学科の課題であろう。

第二に学習密度の維持方法がある。毎週一回九十分という時間割制度のもとでも、学生は毎週三時間の自習が課されるという規定はある。しかしこの規範は学習密度の保証とはなっていない。ワークショップやディベートは、高密度の共同作業によって参加者の自発的学習を実現するシステムである。したがって参加者に求められるスキルが不十分であれば計画は実現しない。スキル不足の解決手段はいくつか考えられる。一つ目は授業に教育助手(TA)を加えることである。二つ目はプロのファシリテーターへの委託である。三つ目には宿泊をとまなう集中授業の導入である。これらの手段と通常の授業との組み合わせは無数に考えられよう。いずれも経費がかかる手法である。しかし参加型教育のコストは決して安くならないことを認識すべきであろう。

第三に導入科目の次をどうするかという問題がある。とくに気になるのは、日本には初心者向けプログラムは種類もひじょうに多く、またかなり入念に工夫されているのに、次の中級コース用は極端に貧弱なことである。その好例は語学や情報教育のテキストや参考書のみならず語学辞典類に見られる。学生にとつての学習の岐路は、実は入門レベルを終えた段階にある。さらに高度な学習を目指すのかそれとも単位取得だけで学ぶことを完了するのかは、この段階での本人の意思決定とそれに係わる教員の指導が決定的な意味をもつ。その意味で二年次ゼミの授業をいっそう緻密にデザインする工夫が必要であろう。

最後に強調しておきたいことは、場としての大学の意味である。学生が学ぶとき彼らはたんに記述資料だけに頼るのではない。心身を使い外部の世界を知覚し、絶えず意識を作りかえながら行動に移っているのである。学習を心身行動の一部として捉えるとき、知覚の場が知的刺激に満ちているかどうかが学習密度の鍵となる。学生にとつて大学はみずから知

覚を働かせる世界にはかならない。大学という場が、メルローポントイのいう「高等な行動」を刺激し得ないならば、学生は「反射行動」のレベルから抜け出せないであろう。大学の文化あるいは情報空間の質が、教育の技術的改善以上の重要性をもつのだ。その意味で大学の幼稚化や世俗化は、教育を頹廢させる最大の原因なのである。学生の〈考える意志〉を育てるには、大学に育てる意志がなければならぬ。

注

- (1) 国際政治学科では、この科目のために学外講師による講演会を実施する予算を組んで、全クラス合同授業として実施している。これは学生の息抜きと国際政治の現場からの生の情報に触れさせるという目的がある。○八年度は提携校の沖縄大学から教授を招き沖縄の歴史と現状に関する講演が計画されていた。また○二年度のカリキュラム改正以降、学生の科目履修を体系化させるために専修コース制を導入した。国際関係研究、平和学・地域研究、政治学・政策研究の三つのコースと、英語をとくに多く学びたい学生のための英語インテンシヴ・コースが設置され、一年次生は後期末にコース選択の登録手続きをとることになった。そのためのコース説明会が合同授業として組み込まれた。
- (2) 前期開講のファーストイヤー・セミナーIは、学習支援センターが全学共通の授業デザインを担当している。この授業はワークショップ形式のものではないが、部分的にはかなり厳格な時間配分を設定した授業も含まれ、クラス担当教員に注意を促している。
- (3) アイスブレイクの実例はとくに海外のウェブサイトを検索するといくつでも見つかる。日本ファシリテーション協会のホームページのツールページに「アイスブレイク集」があり米国のサイトリンクが掲載されている。http://www.taj.or.jp
- (4) 早口言葉のウェブページの例をあげておく。http://www.nobi.or.jp/i/kotoba/hayakuchi/
- (5) http://www.iowa.edu/~cq/2002 Basic Facilitation Primer.pdf

資料① 授業スケジュール

国際政治学科の初年次導入科目における授業の全面ワークショップ化実験（大熊）

- 第1回（9月24日）授業ガイドとアイスブレイク
- 第2回（10月1日）チーム分け・約束の承認
- 第3回（10月8日）〈哲学〉の購読と作業（Ⅰ）1-10章
- 第4回（10月15日）〈哲学〉の購読と作業（Ⅱ）11-20章
- 第5回（10月22日）〈哲学〉の購読と作業（Ⅲ）21-30章
- 第6回（10月29日）講演会
- 第7回（11月5日）コース説明会*
- 第8回（11月12日）〈弁明〉の購読と作業
- 第9回（11月19日）〈老子〉の購読と作業
- 第10回（11月26日）ディベート（1）
- 第11回（12月3日）ディベート（2）
- 第12回（12月10日）ディベート（3）
- 第13回（12月17日）ディベート（4）
- 第14回（1月7日）ディベート（5）

*コース説明会は合同授業となるので教室の変更がある。

書評の書き方の説明は9回目か10回目の授業で行う

資料② 授業進行表

授業進行表 第1回 9月24日(水)

この授業の作業	アイスブレイクとチーム分け	
時 間	担 当	目 的
09:00-09:05	あいさつ	ゲーム 次回、各チームはボースンとチーム名を発表
09:05-09:15	名札・アンケート記入	
09:15-09:45	アイスブレイク	
09:45-10:15	チーム分け	
10:15-10:25	当番順の抽選	
10:25-10:30	出席カード記入	

八論
説

授業進行表 第2回 10月1日(水)

この授業の作業	チーム編成、授業ガイド、約束の採択	
時 間	担 当	目 的
09:00-09:05	あいさつ	次回より授業本番
09:05-09:20	ボースン・チーム名称発表	
09:20-10:00	授業ガイド 授業のやり方 要約報告・ディベートの方法 作業課題と役割分担の重要性	
10:00-10:15	約束の採択	
10:15-10:25	チーム作業日時の相談と決定	
10:25-10:30	出席カード記入	

修道法学
三三卷
一
号

九六
(九六)

授業進行表 第3回 10月8日(水)

国際政治学科の初年次導入科目における授業の全面ワークショップ化実験(大熊)

この授業の作業	哲学の購読 (I) 1-10章		
時 間	担 当 者	作 業	担当チーム
09:00-09:05	大熊	あいさつ (司会交代)	チーム#1
09:05-09:10	司会	あいさつ	
	タイムキーパー 出欠チェック 資料配付 進行チェック		
09:10-09:20	報告者1	要約報告 (1-3章)	チーム#3
09:20-09:30	報告者2	要約報告 (4-5章)	
09:30-09:40	報告者3	要約報告 (6-7章)	
09:40-09:50	報告者4	要約報告 (8-9章)	
09:50-10:00	報告者5	要約報告 (10章)	
10:00-10:15	提案者	ディベートテーマ提案	チーム#4
10:15-10:25	司会者	ディベートテーマ採択	テーマ1
10:25-10:30		出席カード記入	
		会場係	チーム#2
		記録係	チーム#5

授業進行表 第10回 11月26日(水)

この授業の活動	ディベート(1) テーマ1			
時 間	担 当 者	作 業	担当チーム	
09:00-09:05	大熊	あいさつ (司会交代)	チーム#1	
09:05-09:10	司会	あいさつ		
	タイムキーパー 出欠チェック 資料配付 進行チェック			
09:10-09:15	賛成 1			チーム#3
09:15-09:20	賛成 2			
09:20-09:25	賛成 3			
09:25-09:30	反対 1			
09:30-09:35	反対 2			
09:35-09:50	討論			
09:50-10:10	審査員	審査意見 審査票決 (司会交代)	チーム#4	
10:15-10:25	ファシリテータ	コメント		
10:25-10:30		出席カード記入		
		会場係	チーム#2	
		記録係	チーム#5	

△論
説
▽

修道法学 三三卷 一
号

九八(九八)

資料③ チーム表

番号	チーム名称	ボースン氏名	連絡先
# 1			
# 2			
# 3			
# 4			
# 5			
	チーム 作業日時 曜日 限 図書館（ 室）／研修室 # 1 # 2 # 3 # 4 # 5		

資料④ チーム・メンバー表

チーム # 1	名称	
学籍番号	氏 名	連絡先（ケイタイ番号）

資料⑤ チーム別作業分担表

チーム #1

日程	チーム作業
10/08	授業進行
10/15	会場係
10/22	要約報告
11/12	ディベート・テーマ提案
11/19	記録係
11/26	授業進行
12/03	会場係
12/10	ディベート意見発表
12/17	ディベート審査
1/07	記録係

△論
説▽

資料⑥ メンバー別分担作業予定表

チーム #1 名称

①氏名

日程	チーム作業	担当作業
10/08	記録係	
10/15	授業進行	
10/22	会場係	
11/12	要約報告	担当箇所
11/19	ディベート・テーマ提案	
11/26	記録係	
12/03	授業進行	
12/10	会場係	
12/17	ディベート・意見発表	賛成
1/07	ディベート審査	

修道法学
三三卷
一
号

一〇〇〇(一〇〇〇)

資料⑦ 司会進行のしおり

司会進行のしおり I (要約報告のとき)

国際政治学科の初年次導入科目における授業の全面ワークショップセッション
プ化実験
(大熊)

09:00	教員	皆さん、おはよう 今週は…がありました。…。 司会を x x x (名称) チームの … さん (君) に交代 します。
09:05	司会	おはようございます。今日、司会をする x x x チームの y y です、どうぞよろしく。では今日は、テキスト z z z の 要約報告です。 最初の報告者どうぞ。
09:10-18		
09:18		…さん (君) ご苦労様でした。では 2 番目の方。
09:20-28		
09:28		…さん (君) ご苦労様でした。では 3 番目の方どうぞ。
09:30-38		
09:38		…さん (君) ご苦労様でした。では 4 番目の方。
09:40-48		
09:48		…さん (君) ご苦労様でした。では最後の方
09:50-58		
09:58		報告者の皆さんご苦労様でした。つぎにディベートテーマ の提案に移ります。一番目の人から順に発表願います。
10:00-15		
10:15		テーマは、…、…、…、…、…の 5 つです。このうち最も 適しているものを選びたいと思います。採決します。1 番 目に賛成の人挙手願います。…人ですね。2 番目、…人。 3 番目、…人。4 番目、…人。5 番目、…人。以上から… 番目…に決定しました。司会を交代します。

司会進行のしおりⅡ (ディベートのとき)

- 09:00 教員 皆さん、おはよう
今週は…がありました。…。
司会を x x x (名称) チームの … さん (君) に交代
します。
- 09:05 司会 おはようございます。今日、司会をする x x x チームの y
y です、どうぞよろしく。では今日は、テキスト z z z の
要約報告です。
最初の賛成意見の方どうぞ。
- 09:10-14
- 09:14 …さん (君) ご苦勞様でした。では 2 番目の方。
- 09:15-19
- 09:19 …さん (君) ご苦勞様でした。では 3 番目の方どうぞ。
- 09:20-24
- 09:24 …さん (君) ご苦勞様でした。では 1 番目反対意見の方。
- 09:25-29
- 09:29 …さん (君) ご苦勞様でした。では 2 番目の反対意見の方
- 09:30-34
- 09:35 賛成意見と反対意見が揃いました。賛成の人で反対意見に
対する反論があればどうぞ。
反対意見の人、補足があれば話してください。
- 09:50 発表者者の皆さんご苦勞様でした。ではディベートの審査
判定に移ります。審査員は審査意見を述べてください。一
番目の人から順に発表願います。(揃ったところで) この
ディベートで賛成意見が勝ったと思う審査員は手を挙げて
ください。…人ですね。反対意見が勝ったと思う人、…人
ですね。今日のディベートは…意見の勝ちとなりました。
司会にご協力ありがとうございました。司会を交代します。
ファシリテーターのコメントです。

△論
説▽

修道法学 三三卷 一号

一〇二(一〇二)

資料⑧ First Year Seminar II 大熊クラス 参考文献・資料目録

国際政治学科の初年次導入科目における授業の全面ワークショップ化実験(大熊)

- 沢田允茂『現代論理学入門』1962年、岩波新書
『考え方の論理』1976年、講談社学術文庫
- 白川 静『漢字の世界 I』1976年、平凡社
- 丸山真男『日本の思想』1961年、岩波新書
- カール・マンハイム『イデオロギーとユートピア』1979年、中央公論新社
ルードウィッヒ・ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』2000年、岩波文庫
- 加地伸行『儒教とは何か』1980年、中公新書
- マルティン・ハイデガー『存在と時間』1994年、ちくま学芸文庫
- 川島武宣『日本社会の家族的構成』1950年、日本評論社
『イデオロギーとしての家族制度』2000年、岩波文庫
- エミール・デュルケーム『社会学的方法の基準』1997年、岩波文庫
- 村上淳一『〈法〉の歴史』1997年、東京大学出版会
- 魯 迅『狂人日記』2004年、講談社文芸文庫
- タゴール『タゴール詩集 ギークーンジャリ』1997年、岩波文庫
- トーマス・マン『トニオ・クレゲル』1995年、新潮文庫
- 神谷美恵子『心の旅』2005年、みすず書房
- チャールズ・テイラー『〈ほんもの〉という倫理』1995年、産業図書
- 倉田保雄『ニュースの商人ロイター』1995年、朝日文庫
- 木田 元『現代の哲学』1991年、講談社学術文庫
- スティーブン・ホーキング『ホーキング宇宙を語る』1995年、ハヤカワ文庫
- 中村秀吉『時間のパラドックス』1980年、中公新書
- 都筑卓司『時間の不思議』1991年、講談社ブルーバックス
- 入不二基茂『時間は実在するか』2002年、講談社現代新書
- 市井三郎『歴史の進歩とは何か』1971年、岩波新書
- 子安宣邦『〈アジア〉はどう語られてきたか』2003年、藤原書店
- エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』(新版)、1984年、東京創元社
- デービッド・リースマン『孤独な群衆』1984年、みすず書房
- オルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』1995年、ちくま学芸文庫
- 高橋昌一郎『理性の限界』2008年、講談社現代新書
- ヨースタイン・ゴルデル『ソフィーの世界』1995年、日本放送出版協会